

knitr

宮崎

2014 年 1 月 9 日

Campbell and Mankiw (1990); 坂井・瀧本 (2010) を参考にする.

はじめに, 乱数を発生させ, 回帰を実施する.

結果を実行すると以下のとおりである.

```
result <- lm(従属変数 ~ 説明変数)
```

結果を表 1 にまとめられる. 回帰係数は 2.1607 である. 結果は図 1 にまとめられる

参考文献

Campbell, John Y. and N. Gregory Mankiw (1990) "Consumption, Income, and Interest Rates: Reinterpreting the Time Series Evidence," NBER Working Paper 2924, National Bureau of Economic Research, Inc.

坂井吉良・瀧本太郎 (2010) 「消費のランダム・ウォーク仮説と恒常所得仮説の検証について」, 『政経研究』, 第 47 巻, 第 1 号, 352-332 頁, 6 月.

表 1 回帰結果表

	推定量	標準偏差	t 値	P 値
切片	9.893	0.224	44.162	0.000
説明変数	2.161	0.345	6.255	0.000

図 1 回帰結果図

